

# 乳幼児期の言語発達に関する一考察

## 2. 自閉児と非自閉児

平松 芳樹

Yoshiki Hiramatsu

人がその一生を通じて使用することばの大部分を、生後数年のわずかな期間に習得してしまうことは驚異的なことであり、神秘的に感じられることである。ところが、ことばの発達にはかなり個人差のあることも事実であり、ことばの遅れを筆頭に種種の問題を抱え気にしている親は多い。筆者の経験でも、教育委員会などの要請で教育相談に向いて、ことばに関する相談件数が多いと感じている。また、本学の幼児相談室へ来談したケースも、すべて何らかの形でことばの障害を訴えている。昨年(平松, 1983)では、従来の文献と対比しながら、来談した自閉児の言語面の特徴を検討したがその要旨は次の通りである。3名の幼児それぞれに自閉児の言語発達の特徴を示していた。ある幼児はことばの獲得が著しく遅れており声を出すこともまれであった。別の幼児の場合は発声数は多いが大部分は意味不明であった。さらに別の幼児はことばの数は多く獲得しているし、発達検査の結果ではことばの発達は標準をかなり上廻っていた(言語発達の指数は136)が、その内容に問題があった。会話・伝達の得点が低く、文字の読み書きの得点が相当高くなっていたのである。通常の発達のステップは、話しことばの段階を3～4歳で達成して、6～7歳で文字言語の段階へ進むのであるが、この幼児は話しことばのステップを未発達のままにして次の段階へ進んでしまったようである。

さて、筆者らは自閉児の言語について、単位時間内の発声をすべてチェックして一定の基準で分析してきている(平松ほか, 1979, 1980)。いわゆる標準的発達についても、この同じ基準にあてはめて比較検討をする必要を感じていた。本稿では、こうした目的で縦断的観察を続けた1女兒の場合の言語発達について報告し、さらに自閉児の場合と比較する。

## 方 法

### (1) 観察の対象・期間

観察対象は1981年1月29日生れの女兒であり、生後3カ月から満2歳までの期間を原則として週に1回家庭訪問して観察することとした。実際には生後3カ月の終り頃の時点から始め、1カ月に2～3回の訪問となった。そして1歳6カ月が近づいた頃父親の転勤があり、遠隔地のため観察を中断した。なお1歳9カ月時に一度転勤先を訪問して記録をとることができた。家族構成は父・母・本児の3人家族であり、父は病院勤務の医師、母は自宅で育児にあたっている。

### (2) 観察記録と分析

住居は倉敷市水島の閑静な住宅地にある。観察は常に同じ部屋(階下の和室6畳)で行い、時刻もできるだけ一定(午前11時～12時)になるよう配慮した。観察時間は1回につき30分間とし、テレビカメラで撮影し、ビデオテープに記録した。分析は後日ビデオテープにより行なったが、前後の5分間を除いた20分間の記録を分析対象とした。テープに秒単位の時刻をインサートし1分間毎の発声数をカウン

トしやすくして、20分間の総発声数と1分間当りの平均発声数を求めた。また、自閉児と比較するためには発声の内容を次の3種に分類した。

- ①意味の判別できる単語（これを発語とよぶ） ②意味単語ではないが要求や拒否などの態度と対応した発声（これを了解可能発声とよぶ） ③意志の表示とはみなされない発声（これを了解不能発声とよぶ）。

## 結 果 と 考 察

### (1) 発声数の推移

全観察記録の中から各年（月）齢を代表する日のデータを抽出し、1カ月間隔で発声量の変化を調査した。データ抽出に際しては、できるだけ満年月齢に近いものを選んだが、多少日数に過不足がある。図1は生後4カ月時から1歳9カ月時までの1分間当りの平均発声数の変化を追ったものである。なお、発声数の数え方はひとまとまりに聞こえるものを1つとした。たとえば「ア」と1音の短いものも「ウー」と長く伸ばしたのものも同じであり、さらに「アバババマウー」のように何種かの音の複合したものでも一息で切れ目のないものは1つの発声とした。

発声数は、生後11カ月頃まで増加してひとつのピークを迎え、1歳1カ月まで減少したのち、またゆるやかな増加傾向がみられている。これは次の項目の発声内容とも考え合わせてみる必要があるが、満1歳前後に質的な転換期があることを予測させる。

### (2) 年（月）齢別発声内容の分析

発声の発達的变化の様子を明らかにするため、月齢を追って発声内容を次のように分析する。

- ⑦ 発声の種類と特徴
- ⑧ 発声の具体例とその時の状況
- ⑨ その他の主な発達的变化（母親から聴取した事実を含む）

・4カ月（6月9日）

⑦ 観察を開始した3カ月目の終り頃の発声は、ほとんどが「アー」

であり時に「アン」「フン」「ウン」などがかすかに聞かれていた。そしてこの4カ月に入った時点では、イ・ウ・マ・ヤなどの音が混じり「アヤー」「イヤー」「ウマー」などと発音レパートリーが増えた。しかしまだ大部分は「アー」音であった。

- ⑧ 発声数の最も多い12分目の記録（発声数12）

／ア／アア／アン／アア／アア／アアア／アンアン／アアアア／アア／アアア／アンアア／アン／（状況：10分程前から座っている椅子が窮屈になり少しむずかっている。）

⑨ 母親が本児の名前を呼ぶと振り向く反応がみられる。いないいないばぁをしてみせるとしばらく顔を注視して遅れて微笑する。

・5カ月（6月30日）

- ⑦ アー音がほとんど聞かれなくて「エン」「フン」「ウ」「プ」などの発声が多くなった。長く伸

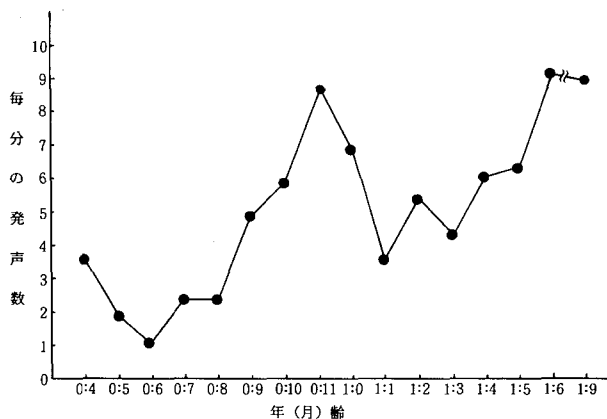


図1 年(月)齢別発声数の推移(1分間当りの平均発声数)

ばす発声は少なく、短くてつぶやくような発声や掛け声のような発声が多い。

① 15分目の記録（発声数7）

／フン／ハ／フプ／ウプ／プー／フ／ウン／（寝がえりしてはらばいになり、指を吸ったりおもちゃをいじくっている）

② 寝がえりを始めた。うつぶせになっている時間が長くなった。ひとりで発音遊びをしていることが多くあまり手がかからなくなり楽になったという。

・6カ月（7月31日）

① アブー、ブーなどの音加わる。イヤアーのように少し長く伸ばす発声やアー音が再び多くみられる。声を出して笑うようになった。いないいないばぁに回答して声を出す。

① 17分目の記録（発声数6）

／アブ／ア／ブー／ワー／アー／アー／（寝がえりしながら母親のひざに近づきスカートにぎったりしながらごきげんのよい声を出す）

② 寝がえりが自由にできて転がりながら移動する。少しはうこともできる。えんこするがまだ不安定である。見たものをつかみ目で確かめて口に持っていく。午睡の時間が短くなった。

・7カ月（9月3日）

① 複雑な発音の組み合わせ発声が聞かれるようになった。エジャー、コガジャコなど。

① 13分目の記録（発声数8）

／アー／アブ／アブ／アブー／アムー／アー／アー／アブ／（はって鏡に近づき、鏡を見て喜ぶ。鏡を手にとったり覗き込んだりする）

② ひとり座りができだした。はいはいが上手になった。鏡に興味を示す。うれしいと歓声をあげて喜ぶ。母親がみえなくなると泣く。

・8カ月（10月5日）

① はじめてパパといえた。母親がパパといてごらんと励ましているうちに口の形がパになり、かすかに発声し、しだいに明瞭な発音になっていった。男性はすべてパパであり時としてパだけであったり、アパとなったりする。

① 9分目の記録（発声数13）

／アパ／ウー／アパ／アパ／アパ／アワ／エー／ア／パ／パ／オー／ワ／ウォー／（VTRの機器に興味があって、はって近づこうとする。母親はそちらから気をそらそうとするがうまく行かない。カメラをかついだ筆者にパパと呼びかけ愛嬌をふりまく。）

② 簡単な動作模倣ができる。いわゆる「芸」ができるようになった。

・9カ月（10月19日）

① 発音のレパートリーが一段と増加。アー・ウーの短い発声もあるが、エンマバーブマモのように一息でつながった長い複雑な発声が目立つようになった。

① 8分目の記録（発声数14）

／ウー／アーオ／ウーオアワ／アバババババブー／アワワワ／アマ／アー／アオーオ／アアア／ウー／オワマママバババ／ババママオバババ／マン／ウー／（こたつの周りをつたい歩きしている。好奇心旺盛でめずらしいものは次々と手に持ち、口にも持っていく）

② つかまり立ちをはじめた。多彩な発音の中から意味のある語が生まれる機会が増えていると考え

られる。たとえば、アババと発声したのを祖母が聞いて自分にババと呼びかけてくれたと喜んでババを練習させる。(子どもは発音遊びを楽しみ、それを喜ぶおとなが身近にいることは大切である。特定の発音をくりかえし練習して単語として定着するのであろう。)

◦10カ月(11月24日)

㊦ ババの発音が多い。母親の発音のおおむがえしも多い。いないいないばぁを模倣する。

① 8分目の記録(発声数9)

／アンモ／バ／パパ／パパ／パ／パババ／パババ／ババ／ウニャイ／(母親のパパという発音をまねて口の中で練習している。電話のおもちゃにさわったり、はいはいしたり、つかまり立ちしたりしながら部屋の中を動きまわっている)

㊧ いたずらが盛んである。動作の延滞模倣がみられる(以前にしてもらったいないいないばぁを、自分でやってみる)。

◦11カ月(12月23日)

㊦ 発音遊びを盛んにする。「アー・ウー」の他に「コー」「コーワ」が多い。

① 14分目の記録(発声数15)

／エン／ココワ／アン／ア／アー／エエ／コ／カカ／ハー／コー／コー／コー／コー／アーン／アー／(本をひっくりかえしたり、母親のひざにはって行ったり、コタツのそばで立ち上がったたりする)

㊧ ひとり立ちできる。ひとみしりがみられ、しばらく母親の胸にしがみついていた。簡単な動作の「芸」が増えた。「ちょちょち」「むすんでひらいて」「おつむてんてん」「こんなこんな(手をひらひらさせる)」などができる。

◦満1歳(2月3日)

㊦ 同じような発音をくりかえしながら少しずつ変化をもたせている。発音練習を楽しんでいるように感じられる。ママ、ワンワン、ニャニャナ(バナナ)の有意味語が聞かれた。

① 2分目の記録(発声数24)

／ドゥー／ダー／タ／ドゥ／ドゥア／ドゥーア／ドゥータ／ドゥー／テァ／タ／トゥ／トゥー／トゥット／トゥット／トー／ドゥドゥ／アー／ドゥドゥ／ダウ／ダ／ダ／ダダ／ダ／ドゥー／(絵本や絵本のケースをいじくり、ケースは片手に持ってコタツのまわりを歩きまわる。絵本を母親に渡そうとする)

㊧ ひとつの遊びの集中(注意の持続)が長くなった。母親のことばがかなり理解できている。たとえば、指示した絵本を取りに行ったり、「行ってらっしゃい」「こんにちは」に合わせておじぎをするなど、ことばに合った動作が確実にできる。

◦1歳1カ月(3月5日)

㊦ 母親に向けて「ママ」と呼びかけることが多い。返事をしてくれるのがうれしいようである。また、何かしてほしい時や希望通りにならない時は抗議の意味で強い調子で「ママー」という。筆者にも「パパ」と呼びかける(まだ男性はみんなパパである)。「カカカ」「マママ」「パババ」のように同じ音をくりかえすことが多い。発声と同時に動作で意志表示をする。たとえば、アーンという声の調子と表情で本をめくってほしいのだということがわかるのである。

① 16分目の記録(発声数5)

／ココ／ブンウーウブ／ママ／パパ／パパ／(こたつの周りを歩きながら母へ呼びかけている。最後のパパは、母へ本を渡しながらのものでいいまちがえている)

㊦ 絵本を熱心に見つめる時間が増えて発声が少なくなった。指示に従った動作もたくさんできるようになった。いくつかの有意義語を発音できるようになってきたが、これまでは単なる発音遊びやおおむがえし的な発声であった。しかしこの頃から「一語文」の段階へ進んできたといえる。ことばを自分の意志の伝達手段として使用しはじめたのである。

◦ 1歳2カ月（4月2日）

㊦ パパ・ママが多く、とくにママを母親への呼びかけと要求のサインとして使用する。自分の名前を呼ばれると、ハァーと返事ができるようになった。

① 16分目の記録（発声数6）

／アー／アカ／アカカ／アーア／マー／ママ／（名前を呼ばれ返事を促がされている。母の髪からヘアピンを取って自分の髪の毛につけようとする）

㊦ 「こんにちは」「ありがとう」でおじぎをする。「ちょうだい」は手を重ねる。「かして」で手渡す。

◦ 1歳3カ月（4月15日）

㊦ 母親への呼びかけに、ママのほかにカカーも使うようになった。カカは電灯でもある。

① 4分目の記録（発声数9）

／アカウァー／アカー／ハァー／ハァ／アー／アー／アカー／カカー／カカー／（電話のおもちゃを母に渡す。お返事はに答える。母親を指さしてカカー、次に電灯を指さしてカカー）

㊦ 声を出す人の方を注意深く見つめる。指示した品物を持ってくる。母親は最近この子とよく意志が通じるようになったという。

◦ 1歳4カ月（5月26日）

㊦ 複雑な発声を組み合わせた発音遊びがみられる。一息で長いものが目立ち、歌うようなリズムをつける。有意義語が5種類聞かれた。（ママ、ナイナイ、アカ、タッチ、パパ）。

① 6分目の記録（発声数4）

／ボードーラニューメーエーパ／アー／ウー／ナイナイ／（紙に線画を描いたのをほめられてごきげん。押し入れを開けに行ったので「ないないして」といわれ、ナイナイという）

㊦ 母親の動作模倣が多くみられる（人形の頭をいい子いい子となでる。キスをするなど）。ことばの模倣も多くなった（たっちしてごらんで「タッチ」、ないないしてで「ナイナイ」）。

◦ 1歳5カ月（6月28日）

㊦ 意味の通じる発声が増えた。同じ単語でも発音が不安定でその時々で多少変わることが多い。たとえば、バナナがバニャ・マニャ・バナなどとなり、返事もハイ・アイ・アーなどという。パパはまだ男性一般をあらわすが、ママは母だけとなり、祖母がバーバ・バーチャンで女の人をオバチャンというように分化した。鳥類はチュンチュンだが、犬と熊がワンワンで猫がニャンニャンと区別する。チャーをお茶・ミルクを注ぐ・風呂へ入るの意に使う。

① 11分目の記録（発声数11）

／マニャ／マニャ／ママ／バニャ／マニャ／バニャ／マニャ／バニャ／マニャ／マニャ／マーアマ／ナイナイ／（おやつに切ってもらったバナナを食べている。帽子をしまつてナイナイという）

㊦ ことば数が着実に増えてきている。自分のレパトリーの発声を効果的に使用する。

◦ 1歳6カ月（7月19日）

㊦ 有意義語が増加。体の部分名称（たとえばテテ・アンヨ）がかなり言える。手を引っばって、アッ

チコ（あっちへいこう）という。アカが3種の意味に使われる。あかり（電灯），赤いくつ（外出），赤ちゃん（幼児を含む）。

④ 9分目の記録（発声数10）

／ニャンコ／ネコ／ネコ／ネコ／ニャンコ／ニャンコ／ノコ／ノココイニ／アカチャ／アカ／（絵本の猫の絵をみつつけていう。後半は部屋を歩きまわりながらの発声。）

⑤ ア・アという発声に指さしを伴って意志を表わすので「本をここに置いて」「この座ぶとんにすわって」「あの帽子をとって」などの意味が通じる。母親の質問にうなずいて答える。数日前にやけどした手を見て「アッチ」という。

1歳9カ月（11月1日）

⑦ 発声のほとんどが有意味語で，意志の交流がよくできる。おとなの質問や呼びかけに対してかなり正確に応答する。幼児音ながらことばの数が一段と増加した。20分間の発声中67%（120）が有意味語である。2語文が現われた。口から出まかせの発音遊びもする。

④ 6分目の記録（発声数7）

／オーバーチャン／ジッチャ／イッタ／オバアチャイッタ／アンア／イヤ／アンガ／（祖母と会話している。数日前おじいちゃんとおばあちゃんに行った。「アンア」とおがんだ。すべり台をすべるようにいうと「イヤ」と拒否。そこにあんがしてといわれて「アンガ」という。）

⑨ ウウといいながら絵本を指さし「これは何」とたずねている。返答を聞いて自分も同じことを言ってみる。質問しながら物の名前を覚えようとしているようである。

(3) 自閉児との比較

上記女児の発達の状態を精神発達質問紙（津守・稲毛，1961）を用いて検査した。1歳2カ月時のDQ（発達指数）は107，2歳8カ月時119と順調な発達である。筆者の観察中にも疾病・事故はなく，標準的な発達であったので，自閉児との比較の場合，本児を非自閉児と呼んで対照することとする。

2名の自閉児（DとE）と非自閉児の発声の変化を，半年間隔の3期で比較する。発声内容を了解不能発声，了解可能発声，発語の3種に分類し，

その総計としての総発声数とともに表1に一覧する。なお，総発声数に対する割合を百分率で示した。

a) 了解不能発声

図2の中で実線で示したものは，了解不能発声を総発声数に占める割合で表わしたものである。

自閉児Dは，I期・II期ともに高率であるがIII期になってやや低くなっている。発声の具体例をあげれば，I期は「アー」「ウー」がほとんどであり，II期には「ウン」「イヤウ」「エン」とやや変化がみられ，III期で「パヒャヒャ」「カキャ」「アイジャ」のようにかなり複雑な発声の組み合わせが聞かれた。

表1 自閉児と非自閉児の発声内容の変化

発声内容	期(年齢)		
	自閉児D I期(2歳11カ月)	自閉児E I期(2歳10カ月)	非自閉児 I期(10カ月)
了解不能発声	0.5 (82) <sup>%</sup>	10.0 (88) <sup>%</sup>	4.5 (78) <sup>%</sup>
了解可能発声	0.1 (18)	1.1 (10)	0.4 (7)
発語	0.0 (0)	0.2 (2)	0.9 (15)
総発声数	0.6 (100)	11.3 (100)	5.8 (100)
発声内容	期(年齢)		
	II期(3歳4カ月)	II期(3歳4カ月)	II期(1歳4カ月)
了解不能発声	0.4 (80) <sup>%</sup>	1.2 (46) <sup>%</sup>	4.2 (70) <sup>%</sup>
了解可能発声	0.1 (20)	0.4 (15)	0.9 (15)
発語	0.0 (0)	1.0 (39)	0.9 (15)
総発声数	0.5 (100)	2.6 (100)	6.0 (100)
発声内容	期(年齢)		
	III期(4歳1カ月)	III期(3歳11カ月)	III期(1歳9カ月)
了解不能発声	1.0 (67) <sup>%</sup>	0.8 (12) <sup>%</sup>	1.5 (17) <sup>%</sup>
了解可能発声	0.3 (20)	1.0 (15)	1.5 (17)
発語	0.2 (13)	5.0 (73)	6.0 (67)
総発声数	1.5 (100)	6.8 (100)	8.9 (100)

\*数字は1分間当りの発声数，カッコ内は総発声数に占める割合

自閉児Eでは、I期の発声のほとんどが意味不明であり「ジャー」「ボラ」「コラシヨイ」などの多彩な発声休みなく聞かれた。II期では「イオンヒヨン」「アジシャ」「ヨイヤイヤ」など複雑な発声であることはI期と同様であるが、発声数(毎分1.2)、割合(46%)ともに低くなり、III期ではほとんど聞かれなくなった。

非自閉児の場合は、I・II期ともかなり高率(78%・70%)であり、III期に急激に減少してほとんど聞かれぬ。I期は単純な発声でありしだいに複雑な発声の組み合わせとなっている(図3中の実線で示す)。

b) 了解可能発声

図2・3にみるように、自閉児・非自閉児ともに低い割合で推移している。自閉児Dの場合にやや高い傾向があるが、総発声数が全体に少ないため相対的に割合が高くなっていると考えられる。発声の種類は、自閉児・非自閉児ともに少なく、

ア・イ・ウ・エ・オの母音だけの単純なものが大部分である。動作や顔の表情をとまなうことが普通である。たとえば「アー」といながら鉛筆を持たせようとすれば、何か書いてくれと要求していると分るし、「ウー」「イー」と顔をしかめれば拒否していると了解できるのである。

c) 発語

自閉児DはI・II期ともに全くなく、III期に「パパ」「タカイタカイ」「ハイ」の3種が現われた。

自閉児EはI期で数唱(ニー、シー、ゴー、ハチなど)がわずかにみられ、II期には数唱のほか色や形をあらわす抽象的な単語(アカ、サンカクなど)や、具体的な「フネ、トケイ、キシヤポッポ」などがあらわれ、さらに「チョウダイ、トッテー」など要求を表現することもみられた。また、不完全ながらドラエモンやウルトラマンの歌がうたえた。しかし発声全体の40%程度である。III期には発声のほとんどが有意味な単語で占められ(74%)、自分の名前、身体の部分名、指の名なども間違わないでいえる。「コンニチワ」「アリガトウ」のあいさつも促がされていえる。「オトウサン・ナデナデ」のような二語文もみられるようになる。(図4)

非自閉児の場合は、I期でおおむがえしながら「パパ」および、いないいないばあの「パー」がいった。II期では「ママ、パパ、ナイナイ、アカ、タッチ」の5種類の発語があった。しかし全体の中の割合は低い(15%)。III期では発声の大半(67%)が有意味語になり、2語文もあらわれた。(オバァチャ・イッタ)。(図5)

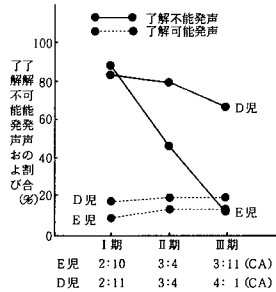


図2 自閉児の了解不能発声および了解可能発声の推移

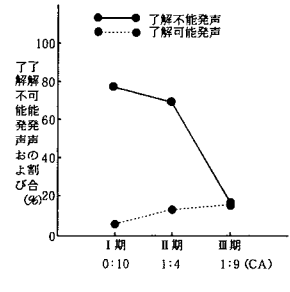


図3 非自閉児の了解不能発声および了解可能発声の推移

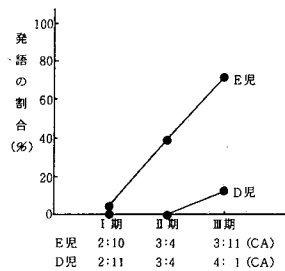


図4 自閉児の発語の推移

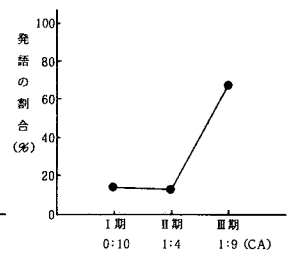


図5 非自閉児の発語の推移

自閉児と非自閉児の発声内容を半年間隔の変化の様子で比較した。ところが、2人の自閉児はほぼ同年齢であるが、非自閉児とは2歳の差があり同列には扱えないという問題が残っている。これを自閉児の発達の遅れとして処理できるかどうかはまだ不明である。しかし、次の諸点については明らかとなった。

1. 了解可能発声として分類したものは、自閉児・非自閉児ともに少ない。この特徴は、母音を主とした単純な発声で表情やジェスチャーをまじえる。笑い声やむずかる声も入れてカウントしても総発声数に占める割合は低い。ことばの発達の有意な指標とはいえないであろう。

2. 了解不能発声として分類したものは、発音遊びつまり喃語であり、これが多いほど後の有意味単語と結びつくことが多い。

3. 了解不能発声（喃語）は、発達の低い段階では「アー・ウー」のような単純な発声であり、しだいに複雑な発声を組み合わせるようになる。

4. 豊富な了解不能発声（喃語）の中から偶然に有意味な単語の発音があらわれ、まわりのおとなが積極的にその発音を促がし、くりかえすうちに、特定の意味をもった単語として使用できるようになる。

5. 了解不能発声（喃語）の割合が減少するにつれて発声の割合が増加する時期がある。その頃に質的な転換がおこるようである。

6. 標準的な発達では、満1歳頃に質的転換期がありそうである。自分で自由な発音の組み合わせを作り発音を楽しみながら、一方ではまわりのおとなのことばを聞いてため込んでいるようである。満1歳前後から2歳前後までを「ことばのため込み期」と呼びたい。

## 要 約

自閉児の言語について検討を試みる時、非自閉児と同一基準で発声の発達の变化をとらえることが課題となった。標準的発達をする子どもの縦断的観察の機会を得たので、言語獲得期の発声状況を調査し、自閉児と比較検討した。その結果、1分間当りの発声数が言語獲得のひとつの指標になることがわかった。発声数が多くなるにしたがい、発音のレパートリーが増大し、有意味語との結びつきの機会が増えるのである。この時まわりのおとなの根気づよい励ましが効果的である。自閉児も非自閉児も喃語はよく似ており、初期は「アー・ウー」など単純なものであり、しだいに複雑な発音を組み合わせるようである。満1歳頃に発音遊びのピークがみられ、有意味語もいくつか現われる。満1歳頃から2歳頃までの間がことばをしっかりとため込む時期ではないかと考えられる。要求や拒否と対応した発声は、表情やジェスチャーと結びついている。むしろ発声の方が動作にそえられているようで副次的な意味しかないと考えられる。

（付記）本稿の一部は第39回中国四国心理学会（1983）において口頭発表したものである。

## 文 献

- 津守真・稲毛教子，1961，乳幼児精神発達診断法 0才～3才まで，大日本図書。
- 平松芳樹・北川歳昭・綱島啓司，1979，自閉児への接近（Ⅰ）プレイルーム内の行動分析の試み，岡山心理学会第27回大会発表論文集。
- 平松芳樹・北川歳昭・綱島啓司・矢吹典子，1980，自閉児への接近（Ⅱ）発声・発語・集中あそびの変化，岡山心理学会第28回大会発表論文集。
- 平松芳樹，1983 a，乳幼児期の言語発達に関する一考察 1. 自閉児の言語について，中国短期大学紀要第14号。
- 平松芳樹，1983 b，乳幼児期の言語発達－自閉児と障害のない子との比較，中国四国心理学会論文集第16巻。